



# NTTOBSV 会会報 No. 14

2010年1月27日(水)

Home page : <http://sv.nttob.org/>  
e-mail : [sv@info.nttob.org](mailto:sv@info.nttob.org)

## 目次

- ◆[新春寄稿](#)  
[本会特別顧問 宮村 智氏](#)
- ◆[最近の動き](#)
- ◆[青年海外協力隊 \(JOCV\) 壮行会開催される](#)  
[中川敦司、小林健司両氏](#)
- ◆[当面の NTTOBSV 会の活動について](#)  
[12月 JICA 地球広場で打ち合わせ](#)
- ◆[SV活動最終報告](#)  
[08'~10'ブータン派遣 佐藤 順氏](#)
- ◆[現シニアボランティア活動報告](#)  
[メキシコの年末年始 横田悦男氏 \(メキシコ\)](#)
- ◆[本会入会者リレー寄稿 私の歩んだ道](#)  
[第二回 「真夏の夜の夢」 村上勝臣氏 \('06トンガ\)](#)

## 新春寄稿

### 第2の故郷を持つ楽しみ

2010年1月 特別顧問 宮村 智

NTT OB SV 会の皆様、新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり、皆様方とご家族のご健康とご多幸、そしてNTT OB SV 会の益々のご発展を心からお祈りいたします。

昨年は政権交代により政治が一新し、経済も世界的危機からの回復の兆候を見せるなど、今後に大きな期待を抱かせる変化が見られましたが、年末にかけて期待を裏切るようなニュースが相次ぎ、残念ながら、先行き不透明な新年の幕開けとなったと感じています。

本年は寅年です。日本の政治・経済がどうあれ、一日に千里を往復し、孤高を楽しむ虎のように、国民各自が勢い良く元気で、誇りを持って生きていくことが大切なのかも知れません。

さて、この度、加藤事務局長から「年が改まる機会に、何か寄稿して下さい」との依頼が

ありましたので、標記のテーマで私の体験や思いを綴ってみることにしました。

— . . . . .  
私は NTT で常務を務めた後、2004年7月に駐ケニア大使に任命され、約3年間、アフリカ大陸に住むという経験をした。私にとってケニアは未知の世界だったので、期待と不安が入り混じった気持ちで赴任したが、結果的には、公私とも誠に充実した楽しい3年間を過ごすことができた。振り返ってみると、その理由は大きく分けて、次のように整理できる。

第1は、駐在したケニアの首都ナイロビの住み心地がとても良かったこと。その最大の要因は気候で、ナイロビは赤道に近いものの、海拔1650m前後の高地であるため、ほぼ一年中、夏の軽井沢のような爽やかで快適な気候に恵まれていた。日常生活については、治安には気を付ける必要があったが、中高層ビルが立ち並ぶ予想以上の大都会だったので、まずまず便利で大きな不自由はなかった(右はナイロビ中心部の写真)。住み心地の良し悪しは人間関係にも左右されるが、ケニアの人々は一般的に陽気でフレンドリーな上に親日的であったし、600人強の在留邦人のまとまりも良かったので、楽しいお付き合いができた。



第2は、ケニアやアフリカが魅力溢れる大地であったこと。ケニアは野生動物の宝庫であり、アフリカ大陸以外では体験できない広大なサバンナでのサファリを存分に楽しむことができた。ケニアは、また、眺めてよし登ってよしの山々、美しい湖、真っ白な浜辺と珊瑚礁の海からなる海岸など、豊かな自然にも恵まれていた。興味深いスワヒリの遺跡もあった。週末や休暇の際には、これらを気軽に楽しむことができた。さらに、まとまった休暇を取れた時は、世界的にも有名なビクトリアの滝やピラミッドといったアフリカの観光地を訪れることもできた。

第3は、大使の仕事はやりがいがあること。仕事の内容は多岐に亘っていたが、貴重な体験の一つは、普通であればなかなか会えない名士(セレブ)と会ってお話する機会を持ったことである。例えば、私が大使を務めていたアフリカ5カ国(ケニアに加え、エリトリア、セーシェル、ルワンダ、ブルンジの大使を兼任)の大統領や大臣とか、これらの国を訪問された日本の大臣・国会議員・財界人・有名人などとの面談はそれぞれに印象的で思い出深い。また、私は途上国に対する開発援助の仕事に経験と関心があったので、現地でこうした仕事に携わることができたのは嬉しかった。アフリカ各国の政府要人は日本やアジアの経済発展の経験に強い関心を有しており、彼らと国造りの戦略について熱のこもった意見交換を行い、アジアの経験を伝えることはやりがいを感じる楽しい仕事であった。

大使在任中、私はできるだけ大使館に閉じこもらずに、様々な外の会合や行事に積極的に参加し、開発援助の現場を訪問することにした。それが、「日本の顔」としての大使の役割であり、アフリカの人々との交流を深め、アフリカの実情を知るためにも有益と考えたからである。また、休暇もヨーロッパなどには行かずアフリカで過ごすことを原則とし、ケニア各地や他のアフリカ諸国を訪問することにした。こうしてアフリカ、特にケニアで、楽しい思い出を沢山作り、3年間の任期を全うして、2007年8月下旬に帰国した。故郷(ふるさと)という言葉は、自分が生まれた土地のみならず、なじみ深くなった土地も意味するが、後者

の意味で、私はすっかりケニアを自分の故郷にして帰国したわけである。

帰国後、ケニアは私に「第2の故郷を持つ楽しみ」を与えてくれた。「故郷は遠くにありて思うもの」で始まる詩があるが、遠い海外に第2の故郷を持つことは格別に様々な楽しみを提供してくれるような気がしている。

その一つは「アフリカ研究という楽しみ」である。私は帰国後に損保ジャパン総合研究所理事長に就任したが、このポストでは時間的なゆとりがあったので、アフリカでの体験をまとめた本を書くことにした。本の題名は「貧しくとも魅力溢れるアフリカの大地から」というもので、大使在任中に高校仲間のホームページに投稿していた「ケニア通信」というブログを基に作成した本である。この本にはノーベル平和賞受賞者で「モッタイナイ運動」で有名なワンガリ・マータイ博士が推薦の言葉を寄せてくれた（左は拙著を前にしたマータイ博士と私）。発行所は毎日新聞社で、発行日は2008



年3月30日であったが、この本の発行後、ラジオに3回ほど出演を依頼され、各所から講演を頼まれるようになった。講演では広くアフリカ全般の問題を取り上げてほしいという注文が付く場合が多かったので、アフリカ全体の研究を始めたわけである。研究といっても、アフリカに関する書物を読み、アフリカ研究者から話を聞き、アフリカのニュースを毎日インターネットでフォローするなどして、講演内容に反映させる程度のことであるが、3年間住んだアフリカの歴史、現状、課題などを改めて幅広く勉強するのはとても楽しいと感じている。ただ、昨年春に知人からの思いがけない要請あり、8月から韓国系の新設銀行の経営に当たることとなったため、現在は講演を引き受ける余裕はなくなり、アフリカ研究も中断気味である。

「アフリカ関係者との交流という楽しみ」もできた。交流相手は様々であるが、在ケニア大使館で一緒に働いた館員やケニア在住経験者との会合は、いわばケニアを第2の故郷とする仲間との同窓会のようなものであり、昔の思い出話を肴にして、いつも盛り上がる。在日ケニア大使館主催の行事や野生動物の写真展示会に招かれて、ケニアを懐かしむ機会も少なくない。さらに、上記のアフリカ研究のためもあって、ある研究者と「アフリカ研究会」と称する会を立上げ、アフリカ関係者を夕食に招いて、アフリカについて情報や意見の交換をすることも始めた。実態は気楽な呑み会に近いが、研究会の参加者はアフリカというと目を輝かすようなアフリカ好きが多いので、本当に楽しい会合となっている。

「故郷ケニアを支援する楽しみ」もできた。ケニアには貧しい人々を助けようと現地で活動をしている日本人も少なくない。例えば、孤児院をやっているKさん。また、スラムの子供向けに幼稚園を開設しているI夫妻。こうした人々の活動に共鳴し、いくばくかの寄付を行っている。大方は自己満足と認識しているが、私の浄財により、ケニアの貧しい人々の暮らしが少しは良くなり、自分自身が天国に行ける可能性も高まるように祈っている。

「ケニアに里帰りする楽しみ」もある。実は、昨年秋に最初のケニアへの里帰りを計画していた。その里帰りは「飛んでイスタンブール」のヒット曲で有名な庄野真代さん率いるNPOである国境なき楽団に同行するツアーであった。国境なき楽団は、日本で中古の楽器を集め、それを開発途上国に送って貧しい子供達にプレゼントした後、その国を訪れて、貧しい子供

達を招いて、コンサートを開催し、音楽の楽しさを教えるといった活動をしている。私は2年前に庄野さんと会って、2009年秋に国境なき楽団のケニアツアーを実現しようと約束し、準備を手伝いつつ、ツアーに同行する予定をしていた。ところが、上記した転職のため、11月下旬に実施された国境なき楽団によるケニア訪問ツアーへの参加を断念せざるをえなくなり、誠に残念な思いがした。せめてもの慰めは、庄野真代さんが招いてくれたケニア帰国報告コンサートに参加したところ、彼女から「ケニア訪問は感動一杯の旅でした」との感想を聞いたことであった。昨年は実現しなかったが、アフリカには「アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカへ帰る」との諺があり、いつかまた、ケニアに里帰りする機会もあるだろうと楽しみにしている。

私はケニアから帰国後、趣味の欄に「アフリカ」とか「アフリカ研究」と書き加えることにした。「アフリカが趣味です」と言えるのは「ケニアという第2の故郷」ができたからである。還暦を過ぎて、アフリカに関する本を読み、アフリカの政治経済の動向をフォローする楽しみができたことは、何か自分の人生がより豊かになったような気がする。また、アフリカに熱い思いを抱く仲間と語り合える機会を持てることは、誠に楽しく、幸せと感じている。

NTT OB SV会のSV体験記を拝見すると、SVの皆様は派遣国での仕事や生活、さらには国内各地への旅行などを通じて、派遣国を体験・観察し、楽しい思い出を沢山作られている方が多いように見受けられる。そして、派遣国を第2の故郷とし、帰国後は、私と同じように「第2の故郷を持つ楽しみ」を味わっていらっやると推測している。であれば、NTT OBでSVに関心を持つ方に対して、SVは帰国後に海外に第2の故郷を持つ楽しみを与えてくれ、人生をより豊かにしてくれることを話して、SVへの応募を慫慂してはどうであろうか。(了)

## 最近の動き

### 石井 孝氏が「シニア海外ボランティアを体験して」と題して講演

本会幹事・顧問石井 孝氏が去る12月16日(水)、BHNテレコム支援協議会理事会において、表題について講演されました。

石井氏は1999年から2年間、SVとしてタイ国バンコック市郊外にあるNawamin Industrial Community Collegeの電気通信関係のカリキュラムと授業方法改善で活躍されました。その体験を基に、SVのミッションや通信関連事業経験者がSVになった場合のターゲットを中心に話され、SVはわが国の産業振興に役立つことも必要等多くの提言もなされ参列者に多くの感銘を与えました。

石井さんの詳細なSV体験記は、本会のHPに掲載されております。

またBHNテレコム支援協議会は、情報通信を活用した国際協力として、発展途上国の地域開発協力と医療施設への支援や発展途上国電気通信関係者の人材育成等をミッションとしており、本NTTOBSV会もご支援をいただいております。(HPは<http://www.bhn.or.jp>)

### 加藤 隆氏が地球の広場で講演

本会幹事加藤隆氏は去る1月20日、JICA地球の広場(東京都渋谷区広尾)において、東京大学教育学部附属中等教育学校1年生40名に対し、「タイの人々の生活—実体験を基にして—」の講演を行いました。これはSV等タイでの生活体験を基にして、タイの人々の生活、特に学

校や子供の生活に焦点を合わせた内容でした。生徒諸君はメモをとりながら熱心に聴いており、多くの質問もありました。

これは生徒諸君が海外に目を向けるきっかけの一つになることと思われます。

## 佐藤 順氏がブータンより帰国

本会幹事佐藤順氏はブータンにおける2年間の任期を終えて、去る1月7日に帰国されました。

氏は次世代ネットワーク（NGN）に関し指導され、多くの成果をあげられました。その活躍ぶりは、本会報「現シニアボランティア活動報告」欄に掲載されております。SV経験を生かした氏の今後のご活躍を期待いたします。

## NTT 海外青年協力隊 新隊員壮行会開催される

平成21年12月11日19時から、渋谷区広尾JICA地球ひろば『カフェ・フロンティア』において、JOCV隊員として派遣される中川敦司、小林健司両氏の壮行会が開催されました。両氏はいずれも現職派遣で今年早々赴任する予定です。任国は中川さんがウズベキスタン、小林さんはケニアです。専門科目はいずれもコンピュータ技術です。

壮行会にはJICAの招待者を含め約25名の方々が参加し、当NTTOBSV会からも加藤事務局長をはじめ5名が参加しました。

来賓で出席されたJICA青年協力隊募集広報課長、佐藤睦氏は挨拶の中で協力隊派遣事業に現役派遣というかたちで、社員を長年派遣してきたNTTに対して感謝されました。また氏は今後とも派遣の継続を要望しました。



## NTTOBSV会の活動について

平成21年12月11日の「JOCV壮行会」の中で、当会加藤事務局長と、NTTのJOCV・OB、OGの代表の皆さんの間で会談がもたれ次のことについて申し合わせました。今後のJICA派遣海外ボランティアに関する広報などに関し当面、当会が担当する。これは現役活躍中のJOCV先輩のみなさんは、日常常務が多忙であるという理由によるものです。今後当会はJOCVのニュースなども扱っていくこととします。

## 帰国報告

### SV 活動最終報告

佐藤 順

指導科目：次世代ネットワーク (NGN)

活動期間：2008年1月8日～2010年1月7日

### (1) 活動の目的

小生の指導科目は次世代ネットワーク (NGN) のプラットフォームにインテリジェントネットワーク (IN) サービスの実現するために助言することであった。

NGN はご存じのように、NTT は 2008 年 4 月から一般のサービスを開始した。

すなわち小生が派遣された 2008 年 1 月にはまだ日本ではサービスしていない新しい技術であった。NTT ではその 1 年前から試験を行っており、小生にとって凡そ概要は分かっていたが詳細は不明であり、本来ならば手を上げないところであるが、行けばなんとかなるという思いがあった。

というのも、今から 25 年前 (1984 年 9 月)、小生は JICA 長期専門家としてグアテマラに派遣された。指導科目はデジタル交換網計画、当時 D70 本仕 1 号が出たのが 1985 年 12 月であるから、D70 を見たこともない前に派遣されたのである。そのときもどうにかなると思った。その時と同じ気分であった。今回も研修などの資料を派遣前に収集した。

IN 機能は以前に研究所で PHS の検討をした、ときにやったことがあるので凡その仕組みは分かっていた。

しかし、NGN 上の IN 機能についてはよく分からなかった。

以前に研究所に勤めていた時に知り合った方を頼り、教えて頂いた。

また NGN のコンセプトの仕様の情報と国際的な動向の把握のため、ITU 勧告書などをインターネットで収集した。

### (2) 活動結果と反省

派遣先はブータン・テレコム料金部門 IN システム担当であった。担当者は若い技術者 1 名 (26 歳大卒)。料金部門は 8 名 (男 4 名、女 4 名) であった。

NGN は一部地域にアルカテルのシステムが導入されていた。ITU 仕様のものか分からなかったが BT では NGN と言っていた。IN システムもアルカテルのシステムが導入されていた。

小生が派遣されたときは「電話投票サービス (NTT 名称：テレゴング)」のサービスを導入しようとしていた。

日本のサービス例の紹介や、その他の IN サービス (着信課金等) も紹介したが実現されなかった。

その他、IN 機能を用いて、携帯電話ヘルプ・デスクの機能の改善を行った。

NGN については ITU の勧告を中心に社内研修を行ったが、すでに NGN が導入されていたこともあり、社内の関心は高くなかった。

2 年目には、新料金システム (携帯・固定・インターネットの統一請求書発行システム) の検討や、料金問題、固定電話減少対策などを依頼されたが、料金システムが専門でなく、十分なアドバイスはできなかった。

### (3) ブータンの生活

1. 言語：ブータン人はネイティブ並みに英語を話すので、1対1で話すときは困らなかった。しかし、彼ら同士で話すときは、現地語（ゾンカ）や現地語交じりの英語でほとんど理解できなかった。家庭教師を付けて現地語を勉強したがほとんど上達しなかった。
2. 食事：ブータン料理は「辛い」、「(肉が)硬い」で有名である。赴任直後はアパートの大家さんに作ってもらったブータン料理を食べていたが、胃炎になり、更には胆石で一時帰国の際日本で手術したこともあり、自炊や外食に切り替えた。  
しかし、最後はブータン料理にも慣れ、「辛さ」は気にならなくなった。しかし、歯が歯肉炎でガタガタになっており、硬い肉はほとんど丸呑みする状態であった。
3. 住まい、電気、水道、電話等  
住居は家具の揃っているアパートメントホテルを借りた。庭には桃やリンゴの木があり、花が咲いてから実ができるまで自然の移り変わりを味わうことができた。  
電気はよく停電した。事務所でもよく停電し、そのつどデスクトップを使用している職員から悲鳴が上がった。水道もよく断水した。  
インターネットはDial-up、ADSL、携帯3G機能を用いたワイヤレスのサービスがあったが、利用者からは速度が遅いとの苦情があった。総裁の話では、収入に見合ったサービス・クオリティだと言っていた。
4. ブータン人の家にも子供の誕生や、誕生日などに招待してもらい、彼らの生活や考え方にも触れることができた。あつという間の2年間であった。

### (4) 感想（ブータンの光と影）

一般にブータンは仏教信仰厚い桃源郷というイメージがある。またGNH(Gross National Happiness)の提唱国でもある。

しかし、経済の発展とともに経済格差、地方と都市との格差、若年者の失業問題、児童労働問題などの課題がでてきている。

## 現地たより

### 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り (No. 29)

「それぞれの土地にその土地の風習 (2)」

・・・大晦日の過ごし方・・・

古い年から新しい年、いわゆる大晦日から新年へ変わるとき、どんな感慨に浸るのだろうか。長い悠久の流れの中で、便宜的に定められた年号が単に変わるだけという、割り切った考えも出来ようが、日本人の精神構造は、初日の出、初夢、初詣、初荷などの言葉に象徴されるように、新年は特別な意味で、深く人間の心の中に息づいていると思う。

新年の抱負。普通、それは、夢と希望に満ちあふれたものになるだろうが、皆さんは初詣や初夢に何を託したでしょうか。あるインテリ家庭に招待されたときの、大晦日の過ごし方を物語風に綴って、少々長くなるが、日本とメキシコの年末・年始に関



する文化比較を試みようと思う。

一般的には、メキシコでは新年の祝いはあまり重要なものではなく、休日になるのも1日だけであり、どちらかという大晦日の方に相当熱が入ってくる。我々夫婦が招待されたということは、クリスマスの祝いと違って、家族だけで過ごす習慣から言えば、意外なことだが、それだけに普段の付き合いから、家族同様に扱ってくれたのだろう。

夜の10時頃から始まった、このフィエスタ（パーティ）は、軽いつまみを時には口にしながら、ある人はテキーラ、又ある人はコーラなどを飲みつつ、ありとあらゆる話題の会話が延々と続く。

この間、主人初め成人した息子達が実にこまめに気をつかい、飲み物や、つまみ類を配って歩く。

この傾向は他の家でも見られたが、噂に聞く、メキシコの伝統的なマチスモ（男性優位主義）などどこ吹く風とばかりに、それが実に自然の動作なのだ。

黙って相手の話ばかり聞いていると、時にはこちらに話を振ってくるので、相槌をうったり、日本の習慣を紹介しながら会話に参加せざるを得ない。日頃から当地のことをある程度知っておかないと、会話についていけず、この種のフィエスタの盛り上がり、水を差す結果になるので必死である。こうやって少しずつ試練を受けながら、現地の人との友好親善を高めるといふ、目的の一端を担っていくのである。

夜中の12時五分前頃から、ラジオのアナウンサーのカウントダウンの声を聞きながら、各自に小さな鐘と葡萄が配られる。12時の時報とともに、手にした鐘を鳴らしながら、主人の掛け声にあわせ、この、「ラス・

ドセ・ウバス・デ・スエルテ」（12粒の幸福な葡萄）と呼ばれる、12粒の葡萄を食べる。

一粒がひと月を意味し、1粒食べるごとに、その月の願いことをする習慣があり、その言葉を考えている内に次の合図があり、とうとう合図についていけず、最後は4、5粒を一緒に口に放り込んだのであった。これでは年度を通じて願い事がかなえられないはずだ。



日本の除夜の鐘を聞きながら年越しソバを食べる風習と、一脈相通じるところがあるものだ。12を表すのは、「健康、仕事、愛、平和、お金、成功、喜び、調和、繁栄、平静、友情、幸運」なのだろうが、こんな良いことを、多くの人が一斉に願うので、神様もすべての人に対応できず、世の中に不満が蔓延しているのだろうなどと、いらぬことを考えてしまう。

この後、リンゴのスパークリング果実酒（シードラ）を入れたワイングラスを片手に、丸く円陣を組み、「サルー、サルー（乾杯）」の合図とともに、一人ひとりが願い事や希望を述べていく儀式が行なわれた。



我々は最後の方に位置していたので、希望を述べることも残り少なくなってしまう、一瞬窮したが、ワイフは「友情」、同じような意味で、私は「世界に平和を」と述べた。

参加者全員が、お互いに抱擁を繰り返しながら、「新年おめでとう」の挨拶を言い合った後で、一人ひとりが箒で家の入り口から、外へ向かって何かを掃きだす仕草を行なった。



これは一年の邪気を払う意味のようだ。さて、それからは旅行に出発だ。各人がそれぞれリュックサックやスーツケースを持ち、手にした棒状の花火を振りかざしながら、家の周辺の1区画を歩いてくる。普段は持ち歩かない、パスポートまで持ち出してくる念の入れ方である。

これは旅行やバカンスが多く楽しめるようにという願いを込めており、主人は盛んに「ハポン、ハポン(日本)」と叫んで歩いていた。あちらこちらを旅行しているようだが、まだ日本へ行った事が無く、いつか行きたいという希望を持っている風で、この声を聞いただけでも、参加した意義があったと言うものだ。



この頃になると周辺の家々からも、同じように旅行グッズを持った住民が、爆竹やラッパを鳴らし、誰かれとなく、「新年おめでとう」と声を掛け合いながら街頭に繰り出して来る。

昔は実際にピストルを空に向けて撃つ人もいたと、本には書いてあった。打ち鳴らされた爆竹やラッパの音が、夜のしじまの住宅街にこだまし、新年を迎えたことを祝うと同時に、不浄な出来事が多かった一年間の憂さを、持って行き所のないままに、これらの諸行動をとることによって吹き飛ばしているのではなかろうか。

感慨に浸る間もなく、外国人が珍しいのか良く声を掛けられ、臨時日本語教師に変身し、「Feliz Año Nuevo」の日本語の意味(新年おめでとう)を教えたりしながら歩く。

旅行のより強い希望がある人は、さらにもう1週町内を歩く行為を追加する。家に戻り、入り際に今度は家の中に小銭の投げ銭を行ない、その上を踏みながら家に入り、各自容器に入れた水を家から外に向かって振りまく。

これらの諸行為を見ると、箒で邪気を払ったり、小銭でお金(福)を呼び込もうとするのは、日本の「鬼は外、鬼は外、福は内、福は内」といいながら、邪気をはらい福を呼び込むために、豆をまく節分の行為を思いおこし、水撒きは清めの打ち水と言えなくもない。

一連の諸行事が終わった後では、本格的な食事、さらにはカラオケなどの余興が続いた。我々は最後まで付き合う体力もないので、早めに切り上げたが、それでも夜中の3時過ぎであった。

メキシコでは新しい年を迎えるにあたって、大晦日には新品の衣類を身につけ、他の人からプレゼントされた赤い下着(愛に恵まれるように)、または黄色い下着(お金をもたらしように)を身につけるという話を聞いたことがある。愛も金も欲しい人は重ね着をしたりするのだろうか? 私は新品の下着はともかくとして、どんなご利益があろうとも、そんなものは着ようとは思わない。



この女性は、愛よりも金を選択した?

場所が変わると、同じ様な行事であっても、見た目の内容は変わってしまう。しかしスタイルは変わっても、その中に秘めた意味・内容は、日本とメキシコでは変わっていないのではないかと思われてくる。

これを他に広げてみると、私自身が多くの国を知っているわけではないので、正確ではないかもしれないが、人間の行なうことは国が変われども、根本的には同じ様なものが多いのではなかろうか。それゆえ、お互いを深く知ることによって、共通認識が生まれてくるのではなかろうか。現在世界各地で、紛争が起きているのは、余りにも強者が、相手のことを深く考えずに、自分の価値観だけを

相手に押し付けたり、要求しているのではなかろうかなどと考えてしまった。

上述のお互いの希望を述べ合う輪の中で、言葉に窮してとっさに出たとは言え、ワイフは「友情」、私が「世界に平和を」と述べたことは、この相互理解の中から生まれてくると思う。

その意味でボランティアを志願し、相手の国の中で生活している中で、交流を深める機会を得たのは、貴重な体験で、さらに機会があれば、出来るだけ交流の機会を活用しようと思っている。あるいはより機会を作るようにより努力をしなければならないというのが、正しいのだろう。

自宅に帰り、もち米を炊いて作った、急造の手作りのモチ(風)で料理したお雑煮を食べ、インフルエンザ騒ぎで帰国した折、購入し大事にとっておいた、大吟醸酒の栓を開け、宝物を扱うようにちびりちびと飲みながら、ささやかに新年を迎えた。

個人の立場では、日本人としてのアイデンティティを失わないよう、伝統を少しでも維持しようという気持ちと、当地の習慣に少しでも同化しようとする気持ちの、新たな心の葛藤も芽生えた1日でもあった。

(2010年1月4日、新しい年に当たりて、今年もよろしく願いいたします)



イクスタシワトル山の

## 本会入会者リレー寄稿 真夏の夜の夢

第二回 村上 勝臣 ('06 トンガ)

### 私のサモア旅行記から

サモアについては2009年サモア近海地震による津波が発生し報道されたので皆さんの記憶に今もあると思います。この話はその2年前、私がトンガ勤務時、任国外旅行したときの1コマです。

2007年9月26日午前1時半、私の乗ったサウスパシフィック機は2時間前、フィジーのナンディ空港を離陸し、サモアの主都アピアのファレオ国際空港に着陸した。

私はナンディ出発前、投宿していたナンディの安ホテルバックパッカーズでJICAトンガ事務所のOさんからFAXを受信していた。

FAX曰く「村上さんはサモア到着日のホテル未確定とのこと。到着は深夜なのでJICAでホテルの予約をしました。“ホテルキタノツシタラ”。空港でホテル従業員が“Mr. Murakami”の掲示板を掲げています。その車に乗りホテルへ向かって下さい。送迎料金は40サモア\$ですからそれを支払う事」。

私はOさんに感謝し、空港内でさし向き必要なサモア\$を換金し空港出口ロビーに向かった。換金に20分ほど手間取ったので殆どの客は雨散霧消していた。

「車は上の駐車場だ」と言って私の看板を掲げ待っていた男は、私の先にたって車寄せから続く階段を上って行く。

サモア人にしては肌の白いその男は私が乗り込むと黙って車を出した。プーチンロシア前大統領にそっくりのがっしりした体躯だった。車は白い三菱ランサーだった。

私は車が走り出すと、若しかしたら詐欺団に嵌められたのではと直感した。

『一般的には、客を送迎するのは、ホテルのマイクロバスだ。そのうえ出迎え人はろくな挨拶もしない。若しそうだとしたら、ここでこの男と口論して、午前2時近く初めての外国で車外に放りだされでもしたら生死にかかわる。今夜はとにかく部屋にたどり着いて休むことだ』と気を静めた。

車は満天の星空の下、白い平坦な道を一路アピアの市街へ向かって走った。1キロ位の間隔で道路の両側に数軒の家が立ち並ぶ集落を幾つか通過した。集落に入ると街燈がついて居るので直ぐそれと解った。真夜中とて行きかう車もなかった。

1時間も走ったろうか。いたく長く感じたがどうやらアピアの街に入ったようで両側に街燈がともし家並みが見えた。

ほどなく、車は止まり、プーチン大統領そっくりさんは、クラクションを鳴らした。待っていたように、ガードマンが門を開けた。車は右折して構内に入った。どう見てもアピアで有名なホテルではない。「地球の歩き方」を機内で見て来たがホテルキタノツシタラは街の奥まった位置にある。ここは街の入口だ。

車から降りると、男はガードマンと暫くサモア語で話していたが、ガードマンから鍵を受け取り、私を一階の外からそのまま入れる1室のドアを開け、部屋の電灯をつけてから鍵を私に渡した。建物は2階建てのアパートのような造りでどの部屋も灯は消えていた。

「明日午前9時に来る。お前がホテルを変えたければ私が案内する。旅行したければ私が紹介する。何かあったらここへ電話しろ」と電話番号を書いたメモ用紙をわたすと立ち去った。私は自分の身の安全を考えて口論するのを抑えて一応「ありがとう」と言って別れた。

部屋はワンルームであったが清潔だった。温水シャワーも使えた。私はシャワーを浴びてからフィジーから持ち込んだラム酒を一杯飲んで先ず朝を待つことにした。

『若しかしたら、私の屍が太平洋に浮くようなことになるかもしれないな。それは運とあきらめるとして、JICAへ迷惑がかかるのは避けなければならない。プーチンは朝9時に来る。それまでにJICAサモア事務所へ救助を求め迎えに来てもらおう。朝一番にサモア事務所へ電話するために公衆電話を起きたら探そう』。午前3時過ぎたころ、うとうと眠りに落ちたようであった。

朝、車の騒音で目が覚めた。7時だった。南国の朝日がさしていた。私は部屋を飛び出して道路へでてみた。

ここは矢張りモーターで「ヘニーホテル」と看板がでていた。首都だけあって、アピアはもう車の往来が始まっていた。この道は空港からアピア市街地へ向かう幹線道路であるはずだ。従って車の往来も激しいのだろうと思いながら空港の方へ50mばかり歩いて、路傍にコンビニエンスストアを見つけ、公衆電話があることを確認して、テレフォンカードを買った。JICA事務所へは8時ごろ電話しようと考えながら、朝食のパンと牛乳を買って戻った。

私は「おや」とヘニーホテルの入り口で立ち止まった。このホテルの道路を挟んだ向かい

側に「バレンタインモーテル」の看板を見つけたのである。確かに事前に読んだ案内書のとおり空港から来て左側にあった。ヘニーホテルは「地球の歩き方」には載っていない。

いったん部屋に戻ると私は、急いでバレンタインモーテルへ向かった。

トンガ人のように大柄な中年のママさんが未だ乳離れをしない娘を抱えて迎えてくれた。私は早朝押しかけた事を詫びてEメールで申し込んだが返事得られず、来てしまったが部屋が空いていれば一週間逗留できないか尋ねた。「空調のある部屋はふさがっているが、扇風機の部屋はOK。村上からのメールは受信していた。暫くコンピュータが故障して貴方のメールは三日ほど前に読んだ。空港に迎えはだしたのだけれど」と調子のいい返事が返ってきた。

「一〇分後にはチェックインしたい」。「OK」。

私は『神は私を見捨てなかったようだ』と呟きながら八時前にバレンタインモーテルへチェックインした。

朝9時、『白昼、幾ら強盗団でも観光客に殺傷行為はしないでだろう』と思いながらも警戒しながら道路を渡ってヘニーホテルへ行った。プーチンはアロファシャツに身を包んで相変わらず精悍な顔をして現れた。私は挨拶を交わした後バレンタインモーテルへ移る事を説明した。プーチンは『ちえっ。大きなカモを逃がしたわい』という表情をしたが「OK。何か私に頼みたい事があれば、いつでも私に電話して来い」と言って白いランサーを走らせて立ち去った。その引き際の潔さは慣れているのか敵ながら見事に感じた。

私は開店したモーテルのフロントと言ってもホテルとは全く装いの違う事務室に立ちよった。一泊の清算と鍵を返すためである。日焼けしたサモアのお嬢さんが一人いた。請求書の中にはぼっきり40サモア\$の送迎料金も含まれていた。

私は清算した後、プーチン氏について聞いてみた。彼女は、「彼の仕事はねえ。いろいろと観光客を空港で拾ってホテルへ案内するの。今回、貴方を2晩泊める約束だったの。その後は別のホテルへ泊めると言っていた。彼に会いたければ、このモーテル内にあるそこのバーに来れば今夜9時ごろ会えるわ。彼は毎晩来るの」。目をやるとそれらしい建物が見えた。

少し気持に余裕の出た私はその夜9時、ヘニーホテルのバーへ行ってみた。プーチンは薄暗いカウンターに座って何か飲んでいて。私は彼のそばに座りビールを注文し「ビール一杯どう」と話しかけた。「ノー」と彼は言ったが「良いめぐり合わせに」というと「それじゃラム酒」というので彼にラム酒をおごった。そのとき私は今回の経緯について彼に質問するのを止める気持ちになっていた。

「ビリヤードをやらないか」と彼は私を誘ったが私は出来ないと言って断った。彼は知り合いらしい男と1時間ビリヤードをやり白いランサーで走り去った。帰りがけに「何か頼みたい事があったら電話しろ」と私に言った。「OK」と私は答えた。

私はその後一週間、あの冒険小説「宝島」を書いたスティープンソンの住居であった博物館訪問、島めぐり等を楽しみながら一週間バレンタインモーテルに滞在した。宿泊者の多くはオーストラリア、ニュージーランドの観光客だった。そこは案内書の通り家庭的な雰囲気だった。



サモアの国会議事堂（伝統建築）

私はJICAサモア事務所には定期的に電話報告をしたがミステリーの話はしなかった。冒険小説「宝島」の生まれた島で体験した私の小さい「真夏の夜の夢」としてとっておこう

と考えたからである。

(2007. 11. 01 トンガ TCC 社宅で)

---

### 編集後記

・編集担当しております村上です。今回は当会特別顧問、宮村 智氏から寄稿頂きました。氏には海外生活体験の大先輩として、時に応じ投稿をお願いしようと考えております。

・記事にも載せましたが、NTTグループから派遣される JICA 海外ボランティア (JOCV,SV) に関する情報を当面、当会で発信することにしました。みなさまのご理解、ご協力をお願いします。

総編集長：NTTOBSV 事務局長 加藤隆

編集長：NTTOBSV 村上勝臣

発行：NTTOBSV 会 ([kato2415@jasmine.ocn.ne.jp](mailto:kato2415@jasmine.ocn.ne.jp))